海保漁村覺書

町田三郎

（一）

海保漁村の生平に關しては、養嗣子元起の墓碑及び漁村の自記にもとづいた同じく元起の精しい年譜がある。[1]

漁村は寛政十（一七九八）年十一月、南總武射郡北清水邑（現横芝町）に生まれる。父恭齋の第三子であった。幼名彦三郎、のち尚賢字を純卿という。また後年自ら元備、字は順卿、號を漁村と稱した。生まれて虚弱、嬉戯を好まず終日端坐して父恭齋に學んだ句讀臨池の復習につとめ、十三歳の頃には書に秀れ通常の書牘は父の代書をつとめるほどであった。十四歳で江戸に住む親戚の養子となるが江戸は「その喧囂に堪えず」「此れ豈に書を讀むべけんや」として數月ならずして歸郷する。[2] 要はホームシックである。

文政二年、二十二歳。自ら拙齋また愼齋と號す。この年「堅瓠錄」數卷を著わす。唐以前の書に引用された漢魏諸儒の書注を輯集したもので、もとより藏書も少く方法も確立せず人に示せるほどのものではないというが、後年の考證學への方向性をここに見ることができる。

文政四年春三月、二十四歳の漁村は再び江戸に赴く。父恭齋が儒醫であった緣由からか、多紀桂山の子柳汸と相知り、かれに才能を認められる。當時江戸では古賀精里の聲望が高かったが、柳汸はかれを「師心臆決」の人とみなし、大田錦城こそ師と仰ぐべしという。思えば柳汸が多紀家と關係の深い錦城を推すも至極當然のことであったが、偶然とはいえ漁村の生來の資質にぴったりの師をここにえたわけで、運命的な出會いであった。錦城も一見して漁村の資質を高く評價する。

この頃錦城は「論語」を講じていた。かれの講義は談論風發して弟子でノートを採りきれるものは殆んどなかった。その中で漁村だけがほぼ遺漏なく具記し、ノートは三十餘卷に及んだ。恐らく錦城の「論語大疏」二十卷につらなる講義であったろう。

錦城門に至って二年、自ら梅屋山人と稱し「讀書目錄」を作成しその序にこう述べる。

余れ文政辛巳を以て來りて江戸に遊び、專ら讀書講學を以て務と爲す。是に於て狹邪の遊杯酒の歡、凡そ世俗の欲羨するところ、一切これを斷棄し、視て以て寇讎と爲す。故に未だ數年ならずして讀むところの書既に等身に近し。然れども又聞く、書を讀むは書を寫すに如かずと。唐の高宗は九經光武紀を寫し、張參國子司業となり九經を手寫す。その爲學の勤豈に嘉尚すべからざるや。故に凡そその書以て古を考え今を證するに足るものは、亦たみな手錄して冊と爲す。嗚呼余れ生まれて貧しく書に乏し。然れどもその讀むところ既に此の如し。豈

に好む所の篤き、天のこれに賜うところあるか。然らば惠子の車、鄭侯の架、領を引きて望むべし。

文政七年、二十七歳。始めて漁村道人と稱す。「方丈園記」を作る。[3] 錦城は毎歳正月十七日に開講するのが定例であった。その折り弟子たちには作文一篇が課される。たまたま文政八年の正月、漁村はひどい傷寒を病んだ。それでも無理して「宋神宗論[4]」千餘字を書き上げ精書して婢にとどけさせ責を果した。提出された論文は十數通に及んだが、錦城は漁村の文章を第一とし「後世の領袖は必ず此の人ならん」と述べた。

この時漁村はひどい病狀であった。熱も高くしきりに譫言をいう。病床にあって醫師が石膏を投ずるのを知るとこれを拒否し、柳沂の應診を求めた。柳沂は診察すると石膏を投棄し、人蔘を與えた。[5] その後、柳沂の子息の茵庭・曉湖らがこもごも來診し、二旬をへて平復した。柳沂によって生命拾いした正月であった。その四月、師の大田錦城矢倉の春草堂にて病沒。祭文を作る。[6]

文政九年三月、「心太平庵隨筆」を書く。

聖人の經は天下の公理なり。後儒妄りに偏見を生じ、是非を爭い勝負を競い、門戸日々に分ちて聖經荒廢し、公理蓁塞す。儒者の本旨は聖經を奉じ義理を講じ、務めてその正にして大を欲するのみ。豈に私黨を立て曲說を逞うし以て相軋るべけんや。漢晉の儒者訓詁相傳え、謹しんで師說を奉ずるのみ。宋の諸大儒出ずるに及び、專ら義理を講ずるを以て主となす。天道性命より以て仁義忠信日用彝倫の間に至るまで、凡そ聖賢の微辭奧旨、再び今日に白らかなり。是れ宋儒の功なり。宋儒の見るところ高し。然りと雖も訓詁明らかならざれば、則ち亦た由りて以て義理を明らかにするなし。義理明らかならざれば、亦た由りて以て訓詁の正を見るなし。故に漢儒なければ則ち以て宋儒を生ずるなく、宋儒なければ則ち亦た以て漢儒の功を見るなし。漢宋諸儒の言を以て融會貫通し、務めてその平を持して偏執あるなければ、則ち經明らかにして公理出ずるに庶幾し。

漢宋諸儒の善を採る立場こそ漁村の生涯に一貫するものであった。二十九歳の心得である。

漁村は酒を嗜まない。讀書に倦むと煎茶を喫し古人の詩文を樂しむ。同好の士が來れば、「相い與に一室に坐し、典籍環繞、經義の得失を論じ、古今の事の同異を論じ」客去れば思い出すままにいまの會話を記錄して「姑らく以て消閑するのみ」

文政十年、三十歳の六月、法眼柳沂劉君家に卒す。年僅かに三十九歳。翌年には兄良澤が鄕里で病沒、三十五歳。その翌文政十二年、佐久間町から火がでて數万家を燒く。自邸も燒失し、柳沂の長子曉湖の家に避難する。不幸や難儀のうち續く二三年であった。

「秋八月、二門生を携えて日光に遊ぶ」とあるのを見ると、錦城の沒後、漁村は獨立して塾を開いていたことが知られる。九月、なお日光旅行中父恭齋病むの報せがとどく。急遽歸省するが及ばない。遺言で兄良澤の子、元起七歳を養子として携えて江戸に歸る。翌年の四月湯島に移り、秋には再び下谷久保街に轉じる。この頃一部では名を知られていたのか「松平但馬守その子弟を率いて君を請いて師と爲す」とみえる。

(二)

さきの「心太平庵隨筆」から漁村の漢宋折衷の立場は知られるが、自らが家塾を經營し子弟を教育するに及んで、その指導方針を次のよ

うな塾規を掲げていっそう明確にする必要があった。天保元年、時に漁村三十三歳。

讀書講理は學者の事業にして萬世に渉りて易うべからざるなり。聖人の經は天下の公理なり。漢唐の傳疏は聖經の羽翼なり。宋の諸大儒に迨びては、擇びて精、語りて詳、往聖を繼ぎて來學を啓き、道の蘊奥發揮して遺すなきなり。則ち學者今日に在りて漢宋諸家を津筏とし、以て洙泗の淵源に遡洄す。唯だ此をこれ要と爲すのみ。若し竊々然として多きを貪り博きを騖め、以て自喜するものは、聖人の意に非ざるなり。漢宋篤實の學に非ざるなり。吾が黨の士に告ぐ、請う此の意を失すること勿かれ。

右は掲示全體の大綱ともいうべきもので、漢宋諸大家の跡を忠實に追究するのがわが一門の學だとする。續いて學問は人倫日用の學が根本で「若し身を修むるの要を知らずして好んで事功を談ずる者は、外馳の學なり。人事の切近を置きて一草一木の理を窮めんと欲する者は、異端の學なり」と決めつける。

經は以て理を明らかに、史は以て事を明らかにす。二者徧く廢すべからざるなり……。故に二者相徴し、而る後治亂失得の故、判然として決せり。然らば則ち經を講ずるの外、又二十三部の史、亦た是れ學者緊要の事。

詩文固より缺くべからざるの事。後進の士、志を述べ言を立てんと欲するに、此れを置きて何を以てせんや。後の學者宋儒の眞意を錯認し、視て以て詞章記誦の流れと爲し、一切これを排擯するは陋なり。試みに思え、經傳の言、詩に非ざれば文、聖賢何ぞ曾て之を廢せんや。之を爲すの法、詩は溫厚にして和平を尚び、文は暢長にして典雅なるを欲す。此れ吾が學ばんと欲するところの本意なり。

ついで深く世に恥ずべきこととして詩文家の動もすれば某社、某社といって徒黨を組んで閑言語を弄すること、また好んで小說演義世俗の學を講ずること、同斷。

結語として「凡そ物は勤に成り惰に敗る。細事なお然り、況んや學問德行おや」である。これらのこと弟子諸君にのみ善を責めるものではない。「敎學相半」こそわが志であると。

この時から二十年後の嘉永三年、漁村五十三歳、再び塾生に訓課九則を掲示する。

その一に曰く、古人の讀書、經を先きにし史を次にす。子を次にし集を次にす。吾が門も亦た當にその遺意に倣うべし。

以下その九に至るもので、いうところは天保の掲示に等しい。

天保二年、三十四歳。正月全祖望「經史問答」を手抄。二月趙翼「二十二史劄記」手抄、下旬に錢大昕「二十二史攷異」手抄、九月楊龜山「王氏字說辯」節錄、十月王觀國「學林」手抄。(7)

天保三年、易を讀み河圖洛書に至って感ずるところあり、遂に「河圖洛書辯」三篇を著わす。この冬「東涯漫筆」を讀み「博聞强記、國朝儒生の希に見るところなり。この書その平生の得るところを劄記するも大抵平易確實、極めて闡發するところ多し。持論力めて宋儒太極理氣の說を排す。故にその言人事に切近にして虛遠に騖せず……。その古今制度沿革の故を論ずる、最も詳明剴切、粲然として當あり。蓋しその學の長とするところ此に在り。」東涯については晩年の慶應元年、家藏の「盡簪錄」を校正しその跋に「東涯先生博學洽聞、國朝儒先の冠冕と稱す。その著わす所の各種、經史を貫串し、古今を參覈し、極めて以て後學を裨補するに足る。是の編卽ちその一なり。」と變らず高く評價する。漁村の目ざす學問と親近なものと思えたからであろ

う。

天保六年、二月二日毛詩を講じ爾後二七日を講日とする。閏七月十五日周易を講じ爾後五の日と定める。毎月三次。三月七日、石田醒齋歿。醒齋こと鍵屋半兵衛。學問好きで藏書も多く、「東涯漫筆」もかれから借覽した。交際する人士も當時の名流で、大窪天民、龜田鵬齋、大田錦城、佐藤一齋、多紀茝庭、そして漁村。送葬するもの無慮千人。漁村は「石田母七十壽序」を書いている。

天保七年、春から雨つづきで梅雨は長びいて初秋に至っても天候はぐずついていた。いわゆる天保凶作の年である。この年、漁村に就職の話がもち上がる。秋田藩の友人確井佐仲の推薦により二百石で壹岐守への仕官話であったが、家老と會ったところ外居を許さずという。結局辭退。七月晦、筮して「姤の大過に之く」の卦をえた。そこで明日はきっと大風であろうとしたところ果して八月朔、風雨激し。また八月四日、筮して「復の震に之く」の卦をえた。果して次第に雷鳴が激しくなった。「今にして筮の誣うべからざるを知る」易占への思い入れである。

天保八年、四十歳。始めて「周易古占法」を草す。三年後の十一年、「此春周易古占法刻成る」とある。漁村の名を一躍高からしめた著述である。安井小太郎は「日本儒學史」にこの書を紹介して、一卷二卷は古占法に關するもので占法を研究する場合には貴重な參考資料であり考證も精確、三四卷は附錄であるとし、ついでいう。「錦城の考證は汎濫にして要を失ふ觀あれど、漁村は頗る著實なり。乾隆比の學者に似たる所あり。[8]」

天保九年十二月二十七日、故友伊藤忠岱、信州に歿す。祖考以來商賈を業とするも忠岱幼より學を好む。かつて父命をうけて京師に商いするも、歸るに及んで利益はすべて書物の購入に當てた。そこで父も學問することを許した。當時京攝の間では、頼子成・篠崎小弼らが著名であったが、忠岱は學問は經より始むべしとして江戸に來り、錦城の門に入った。著書數部、すべて家に藏す。漁村は「伊藤君忠岱墓碑銘」を書く。良き友であった。

天保十年、「玉海」「西河合集」手抄。「晉書」を讀み考證に益あるものを手抄。

天保十一年夏、高松貝陵は先人未發の見ありとして佐藤一齋と易義を討論し、その答問を「抱腹談」の一書にまとめ、自ら「三千年の秘蘊を發した」と豪語していた。漁村はその謬妄誣妄若干條を指摘して「抱腹談ノ捧腹」として發表する。冒頭に「或人抱腹談ト題セル一書ヲ借シ示サル。コレヲ閲スルニ問フモノ答フルモノミナ捧腹スベキコトノミナリ。今ソノ尤ナルモノヲ筆シテ識者ノ一笑ヲ博ス」という。たとえば貝陵は「後ニ周易御纂折中ヲ讀ムニ至テ、曉然トシテ思ヒ得ルコトアリ。夫此書ヤ、天子ノ富ヲ以テ四百餘州ノ易書ヲ聚メ、四百餘州ノ名家ヲ選ンデ、以テ天下ノ易說ヲ梳アゲタル者ナリ。然レドモ此書ヲ看テ、未ダ易ヲ明解スルコトヲ得ズ。當ニ知ルベシ易ニ於テハ絶テ見ルベキノ書ナキコトヲ」と斷ずる。これに對して漁村はこう批判する。「康熙ノ易折中ヲコトノ外廣博ナル書ト心得テ、偏ク諸家ノ易說ヲ集メタルモノト云フ。コレハ全ク周易諸家ノ書ヲ讀マザルノ誤ナリ。折中ノ書ハ、專ラ李光地ノ手ニ出デテ、諸說ヲ多ク載セタルモノニ非ズ。朱說ヲ敷衍スル中ニ卓見モ有リト雖モ、コノ書ニテ天下ノ易說ヲ梳キ上ゲタリト云フホドノモノニ非ズ。假令コノ書ニ取ルベキ說ナケレバトテ、コレニヨリテ天下ニ一切見ルベキ書ナシト片付ケタルハ、アマリニ武斷トヤ云ハン、管窺トヤ云ハン。此ノ餘、通志堂經

解ニ載セタル諸家ノ易注、學海堂經解ニ載セタル清人ノ易注、其ノ他別行ノ書、及ビ四庫全書提要、四庫未收書提要、愛日精廬藏書志等ニ見エタルモノニ至リテハ、凡ソ幾百部ト云フヲ知ラズ。是非互見スト雖モ、イヅレモ皆傳フル所アリ發明スル所アリテ、經義ヲ裨補スルモノ少カラズ。一概ニコレヲ拄搬セントスルコト、コレ亦捧腹スベキニアラズヤ。」

たしかに「御纂周易折中」二十二卷は、程朱を本注として漢以後衆儒の說を載せ取捨を明らかにする。便利な書ではあるが、初學向けといってよい。漁村が貝陵に從來する易說を博搜せよというのは全く正しい。

なお佐藤一齋については、後述するようにかれの「論語欄外書」を遂一批判する「論語駁異」を書く。批判はいたって手きびしい。また一齋にかかわる二つの話柄が「年譜」に記されている。

その一　弘化元年三月、松崎慊堂歿。「慊堂名は復、字は明復。太田侯の臣。林氏に學ぶも佐藤一齋の忌むところとなり、遂に博士たるを得ず。その人となり頗る見解あり。嘗て曰く、我れ久しく法華宗を厭うと。蓋し昌平學を以て日蓮宗に比するなり。」

その二　弘化二年二月、津藩鹽田隨齋歿。「隨齋名は華、字は子鄂、伊賀の人。古詩に長じ、菊池五山、梁川星巖と相い頡頏す。その才力雄富、二子も遠く及ぶこと能わず……。府君・卷菱湖と交わり最も深し。佐藤一齋の儒官を拜するや、菱湖府君に謂いて曰く、敗物の善價、未だ今年の如きことあらず、捨藏（一齋）是れなりと。隨齋之を聞き笑いて曰く、菱湖こそ最も敗物、惡んぞ人を嘲けるに暇あらんやと。既にして人以て菱湖に告ぐ。乃ち色を作して曰く、隨齋こそ乃ち天下の敗物、捨藏も亦た及ばずと。一時傳えて以て笑いと爲す。」

天保十三年、日光法親王の西覲に小島成齋が扈從し、これに漁村も陪從する。はじめての京都である。錦城とのかかわりからか日野資愛らに厚遇され、高雄・槇尾・栂尾と遊び「看楓記」を作る。栂尾の寺で古器を鑑賞する。「既にして白日西に匿るれば則ち割愛して寺を出ず。僕人炬を照して進み、燭を秉りて左右す。戴薪の女の相い携えて歸るを見るに及び、則ち又慨然として居民產業の易々たらざるを思う。豈れ老杜の所謂る形勝餘りありて風土の惡なるものか」

天保十四年、此の歲二の日は左傳・文章軌範、七の日は尙書・文章軌範を講義。「文章軌範」は翌年の八月で畢る。やがてこれは「補注文章軌範」七卷として上梓されるが、その序の末にいう。「余年來是の書を愛讀す。凡そ字句の注明すべきものに遇わば、時に之を疏記し、以て講習に便ならしむ。未だ必ずしも古人の矩度の在る所を知る能わずと雖も、亦た以て文家の錯辭本あり、使事典あるを見すに足るに庶幾きか。玆に及門の彥に課し、日に數葉を校錄せしむ。而して二三子密勿として從事す。故に僅かに未だ一歲ならずして便ち能く編を成し都合七卷を得たり……。」

島田釣一の漢文大系「文章軌範」解說に次のようにいう。

（文章軌範ノ）伊東龜年以下ノ注釋ハ冗濫膚淺ニシテ未ダ信ヲ置クニ足ラザル者アリ。獨リ先生ハ精深博大ノ學ヲ以テ此ノ書ニ就キ誤謬ヲ正シ出典ヲ證シ、事理ヲ極盡シテ而ル後ニ止ム。其學術ノ淵懿ニシテ識見ノ超邁ナル、之ヲ彼ノ土ノ學者ニ求ムルニ、王伯厚・顧寧人ノ下ニアラズ。洵ニ文章軌範注釋書ノ白眉ナルノミナラズ、文章軌範ヲ離レテ孤行スルモ、猶ホ一部ノ隨筆トシテ困學紀聞・日知錄ノ諸書ニ比シテ遜色アルナシ……。

島田は右の如く高い評價を補注に與えるが、それは決して「我家學

ニ私スル」ものではないと辯明する。鈞一が漁村の高弟島田篁村の息で、いわば孫弟子に當るところからの言である。

ところで解題の中で「一部の隨筆」としても困學紀聞、日知錄に比べて遜色がないという。そうした一例と考えられるものを掲げておこう。冒頭の韓愈「與于襄陽書」中の一節「國子四門博士」、すなわち貴族の子弟を教育する四門館についての漁村の補注である。

補注　六典、國子學博士二人、文武官三品以上及び國公子孫從二品以上曾孫の生たる者を教うるを掌る。四門館博士三人、文武官七品已上及び侯伯子男子の生たる者、若しくは庶人の子にして俊士生たる者を教うるを掌る。「唐書百官志同」又曰く、四門博士三人、正七品上、注、後魏書劉芳表云う、太和二十年、四門博士を立つ。四門に於て學を置く。按ずるに四門の名此に出ず。隋始めて國子を隷す。國子とは書の所謂る胄子なり。周禮師氏三德三行を以て國子を教う。凡そ國の貴遊子弟ここに學ぶ。漢に博士祭酒國子學大學四門館あり、是れを三館となす。漢書百官表、博士は秦官、古今に通ずるを掌る。秩比六百石、員多く數十人に至る。武帝建元五年、初めて五經博士を置く。宣帝稍しく員十二人を增す。北堂書鈔設官部、漢舊儀を引きて云う、博士は秦官、博とは古今に通じ然否を辨ず。嚴有翼云う、書に守國子四門博士と稱するは、當に貞元十八年秋に在るべし。

條々此の如きが補注のスタイルである。

弘化三年、江戸は正月匆々から大火に見舞われる。幸い湯島の聖堂は類燒を免れるが、昌平黌の校舍と寄宿寮とは灰燼に歸した。年譜にも「正月十五日、晡時本郷丸山より火を失し、西北の風正に甚し。延燒二里餘、十六日晡時に漸く滅す」とある。その六月、「亞墨利加の夷艦二隻、浦賀港に至り、互市を請う」時代はようやく急迫の度を深めつつあった。

弘化四年、朱彝尊「經義考」放翁「老學庵筆記」「公羊傳注疏」「嘉慶本儀禮注疏」入手。

嘉永元年、五十一歲。四月安藤卓峯の故宅を買いとり、五月久保衚から移り住む。十二日開講。下谷練塀小路で、今日の御徒町驛の南東に當る。森鷗外は「澁江抽齋」でこう書いている。「海保の塾は下谷練塀小路にあった。所謂傳經廬である。下谷は卑濕の地なるにも拘らず、庭には梧桐が栽えてあった。これは漁村が其師大田錦城の風を慕って栽えさせたのである。(9)」

五月故友篠崎司直歿。司直は東金の人。ともに錦城に學ぶ。性狷介にして潔癖を好む。韮山の縣令江川太郎左衞門に請われその子弟及び家士を教導する。また門人津藩柳田猪之介沒。十二月侍臣法眼兼醫學教諭小島寶素沒。寶素諱は尙質。「古學を好み、宋已還空理の說を喜まず」醫官中學才第一と謳われる。渙村と交わりもっとも深しという。「傳經廬文鈔」に「與寶素翁書」がある。

嘉永二年、閏四月門人の阿野董山が万八樓にて書畫會を催した。塾生數名が世話役となり手傳った。董山は伊勢の人、布靴の製造を業とし產を成す。經を元起に學びまた子弟をも學ばせていた。繪畫好きであった。ところがこの書畫會、酒席の果てお互いに罵しり合う狂態を演ずるに至った。翌日董山は仔細を報告し述懷する。「僕今にして書畫會の果して君子の道に非るを知れり。」

三年後の嘉永六年正月十日、「苣庭劉君の綠里の別業に讌集し、訪古會を修む」。會後その喜びを一詩に託した。「劉君は我を愛する者、吾を招きて別墅に讌す。高風は世の欽うところ、賓侶みな文雅。異書相い對展し、咀嚼して眞假を辨ず。校讐は雄向を推し、討論は鄭馬を

憐れむ。君曰く繼ぐに燭を以てし、卷を收めて且に斝を揭げん。客醉い君亦た樂し、嘯咏す淨几の下。乃ち今我吾を忘る、豈に世事の惹かるるあらんや。」

書畫會に對する訪古會の清賞をうたうものである。この訪古會に關しては、明治十八年森立之はその「經籍訪古志」の跋文で次のようにいう。「(澁江) 全善、海保元備、伊澤信道、堀川濟らと毎月一次、預め夜をトして綠汀に會す。綠汀とは本所綠町多紀樂春院の別莊なり。諸子環坐、古本を披閲し之が論定の會を爲す。會後宴を開き、各々醉いに乘じて歸る。二州槁上、月を踏み詩を詠ず。此れは是れ三十年前のこと」(原漢文)。同好の士のいかにも樂しみ溢れる集いであった。

二年の暮れ方、長者町から火が出、數町を燒き拂う。火は傳經廬にも迫る。門人松平采女防火手數人を率いて屋根に登り、消火を指揮し、ようやく燒失を免れる。三好正秀も狂奔して見舞いに驅けつける。正秀號芙山、神田須田町に住して婦王散を商う。任俠にして賓客を喜ぶ。藏書千餘卷。經を漁村に學ぶ。家もとより素封なるが輕薄兒と交わり、縱酒宿妓を以て壯年にして歿す。惜しむべし。

嘉永四年、五十四歳。元旦の詩。

山房春色に富み
盎々として長松に滿つ
門外車聲罕に
樽中酒味濃し
群書は各處に堆く
一讀して心胸豁なり
此の意誰れか能く會せん
縱然として筆峰に入る

十月、中庸鄭氏義稿本成る附攷一卷、合して八卷。

嘉永五年、この夏「待老筆記」を草す。また「經解總目」を書す。

十二月「漁村文話」刻成る。この冬始めて水戸烈公に謁す。また「周易古占法」刻成る。明けて六年の正月「漁村文話」の製本もできあ上り、二月水戸烈公、一槁家、因州侯、忍侯、川越侯、松平將監へ一本を贈る。

此の歳先師錦城の「春草堂集」寫本成る。跋に曰く、「春草堂集二十一卷、劉君莅庭寫手に命じて先生の手稿本に從いて謄錄す。余因りて之を校讀するをう。蓋し先生雄傑の才奥博の學を以て、專ら意を經義に刻す。その詩古文率ね一揮卽成、甚しくは意を經ず。然れどもその軼氣奔放、思致超卓、亦た以てその襟懷の落々として人に過ぐるを見るに足る。當時の耆宿井四溟の若きは、則ち先生蓋し嘗て一刺謁するのみ。長久保赤水の如きは、蓋し唯だその名を聞くも未だその人を見ずという。山本北山は則ちその初年師事するところの者。その嚴事するところの者は、劉君の祖藍溪先生、老桂山先生たり。その俱に交歡するところの者に及びては、山中恕之、小川誠甫、吉田篁墩、龜田鵬齋、藤田幽谷たり。他の醫官は山田圖南、聞人は太田南畝、近藤正齋、詩人は大窪詩佛、梁星巖、國學者流は平春海、橘千蔭ら諸名流。以て書家松平陵、田玉峰、泰星池らに及ぶ。その人品學問の概、往々之を集中に見る。則ち後の世を論ずる者、亦た未だ始めより斯の集に資るなくんばあらず……。」

藤田幽谷の「錦城先生大田才佐墓表」は、漁村の右の記述と出入するところがあるが、錦城の生平について互いに補完し合う記述となっている。次に揭げておこう。「(錦城) 遂に四方の志あり。西は京師に詣り、東は江都に遊び、當世の宿學老儒を覓め以て之に嚴事す。所謂

る淇園先生、北山先生は共に文を以て名あり。雄を東西に稱す。而して益を請い疑を質すも、皆なその意に滿たず。是に於て慨然として之を古人に求めんと欲し勵精刻苦、學大いに進む……。先生素より奇を懷き氣を負い、妄りに人に屈せず、大醫桂山多紀氏、博學洽聞にして名關東を覆う。而して客を愛し士に下り、一時知命の士多く之に從いて遊ぶ。而して特に先生の才學に服し、その子弟をして學を受けしむ。毎に人に語りて曰く、才佐は眞の才士、今世縫腋の第一と。是に由りて名を知らる……。」

（三）

嘉永から安政へと時代が移るに從い、國の內外狀勢はいよいよ緊迫の度を增していった。嘉永六年にはロシアの軍艦が長崎に來航し互市を求め、別隊が樺太の駐在所を襲擊奪取する。これより先きペリーは久里濱に上陸し、國書を手交して互市を要求する。幕府は日米和親條約、いわゆる神奈川條約を締結調印し、下田、箱館二港を開き、また日英和親條約に調印し長崎、箱館、オランダには下田、箱館を開港する。これらの政策は當然攘夷論者を刺激する。海防論議が幕府の制止にもかかわらずしきりに說かれる。漁村もまた「對亞夷書」を水戶烈公に奉じる。騷然とした時世であった。

箱館の開港にともなって幕府は新たに警衞その他諸般の任に當る武士團、箱館使院隊を結成し派遣する。門下の梨本公密も撰ばれて任につく。漁村は「送梨本公密祗役箱館序」を書くとともに門人にそれぞれ送別激勵の詩文を書くよう命じる。この年の初めには元起と門弟の津川健助を伴って生麥村までアメリカの艦船を見學に出かけている。時局に無關心ではいられないからである。漁村は梨本公密を送る文に概略次のようにいう。「我が邦昇平數百年、文敎武衞未だ必ずしも昔日の盛の如からず。紀綱法度未だ必ずしも日々に以て萎靡せずんばあらず。人の勇威未だ必ずしも古に比せず。風俗未だ必ずしも日々に以て澆漓せずんばあらず」このように弱體化したわが國に貪惏無厭の外國勢力が利益と邪敎とで攻擊をしかけてきた。どう對處するか。多くの者は力づくの攘夷をいう。「今の談ずる者ただ武衞の貴ぶべきを知りて文敎の先んずべきを知らず。その土を爭うを知りてその人を爭うを知らず」從って箱館を中心としてその地域を平穩公正に治めていったならば、外夷もつけ入る隙はないであろう。公密らにはそれを期待すると。翌年の「邊政備覽」一卷は「專ら北邊の俗を化して王政の民と爲すを論」じて梨本公密に贈ったものである。

安政二年十月三日、大地震。同時に數十ケ所から出火。上野界隈で火勢もっとも激し。この時漁村は宿痾を病む。[10] 傳經廬は無事。翌年の八月二十五日「夜大風大雨自東南至」台風の直擊で、築地本願寺の佛堂は倒れ、船舶の破損數知れず。

安政四年、漁村六十歲。二月十四日、侍醫尙醫樂春院法印丹波茝庭歿。享年六十三歲。茝庭名は元堅、桂山の次子、柳沂の弟である。漁村は「劉君（茝庭）と交情最も密なり。その訃を聞きて啼泣止まず」であった。「年譜」によると嗣子の元琰に請われて墓誌を書くとあるが、それはなぜか「漁村先生遺稿」には收載されているが『傳經廬文鈔』には入っていない。「年譜」は茝庭の經歷のあらましを述べ「その交わるところ皆當世の名人にして門徒の籍に登す者無慮數千人。當時號して醫村の龍門と爲す」と稱える。そして文末に一人の客による輕妙な人物評を載せている。曰く、近代の名家はそれぞれに一癖を有しているがその中で純善美を盡くす者はただ茝庭のみである。龜田鵬

齋は酒癖、その子綾瀨は睡癖、佐藤一齋は頗る收斂、號して錢癖、石田醒齋は念佛を好んで佛癖、辻本爲春院は大食漢で食癖、朝川善庵は喘息病みの喘癖、そして美を盡くせりという芑庭にも加藤良白はよく欠伸をするので欠癖ありという。

これより先き多紀曉湖と棠邊の二人が芑庭と相い謀って漁村を醫學館直舍儒學教授に推薦した。三月閣老阿部勢州から正式任命があり、この月二十二日、「孟子」を講義する。處士で醫學館教授となったのは漁村が最初である。

森鷗外は「澁江抽齋」その二にこう書いている。「(抽齋は) 弘化元年に躋壽館の講師になった。躋壽館は明和二年に多紀玉池が佐久間町の天文台地に立てた醫學校で、寛政三年に幕府の管轄に移されたものである。抽齋が講師になった時には、もう玉池が死に、子藍溪、孫桂山、曾孫柳沂が死に、玄孫曉湖の代になっていた。抽齋と親しかった桂山の二男芑庭は、分家して館に勤めていたのである。今の制度に較べてみれば、抽齋は帝國大學醫科大學の教授に任ぜられたようなものである。」

漁村にしても抽齋同樣、名譽なこととこの職をうけとめていたことであろう。ただ殘念なことにこの名譽を整えてくれた「江戸侍醫法眼丹波曉湖」がこの年の十月に歿する。享年五十二。因みに多紀家[11]は劉姓、丹波氏、略系は左の如し。

多紀玉池—藍溪—桂山—┬柳沂—曉湖—元佶
　　　　　　　　　　└芑庭—家琢

漁村は「江戸侍醫法眼丹波曉湖君墓誌銘」にいう。曉湖、諱は元昕、桂山の孫、芑庭の甥に當る。家學を繼承し一意その道の探究を己が任とする。とりわけ學校制度の改革に盡粹し、たとえば醫學館に寄宿寮を設け、また醫學の深奥を究めるためには經史に通ぜねばならぬとし、始めて儒學教授の席を用意し、漁村にこれを委任する。多紀家の藏書一萬餘卷、これを一家の藏として獨占すべきではないとし醫學館に寄贈する。そこには貴重本の宋版千金方、元版千金翼方、注解傷寒論等が含まれていた。曉湖には以前から眩暈の症狀があった。卒した日もかれは醫學館に出勤していた。俄に發作が起き急ぎ歸宅するが再起することはなかった。二男の元佶が後を嗣ぐ。

安政五年七月、暴疫盛行。虎狼痢という。八月二十九日、弘前侍醫澁江道純歿。年五十四。漁村が墓碑銘を撰し、小島成齋の書。「年譜」にはこうあるが實際に書かれたのは二年後の萬延元年。

「澁江道純墓碣銘」の冒頭にいう。

嗚呼、問其名則醫也、問其考古博涉之力則吾儒猶愧焉、宜以尋常醫流目之乎、以吾所親交、唯弘前澁江道純其似之矣。

森鷗外の「伊澤蘭軒[12]」の一節に道純の墓碣銘について語る場面がある。次の如くである。

安政戊午に抽齋が歿し、萬延庚辰に立石選銘の議が起った。時に友人弟子中に二說があった。一は津輕人をして銘ぜしめむと云い、一は故人の親友をして銘ぜしめむと云ったのである。(伊澤) 柏軒等は後說を持して、遂に勝った。既にして海保漁村の志銘は成った。友人弟子達は是を讀んで其大要の宜しきを得たるを認めた。就中、柏軒は起首の「嗚呼、問其名則醫也」以下四九字を激賞して、漁村の肺腑中より出でたものとした。しかし諸人の間には異議も亦頗多かった。遂に漁村に改刪を請うべきもの數條を記した。さて此を誰に持たせて漁村の許へ遣ろうかと云うことになると、衆皆趦趄した。當時漁村は文章を以て一世に雄視していたからである。幸に松田(道夫)は漁村に親

しんでいたので、此を持って傳經廬を訪い、遂に定稿を獲て歸った。

こうした經緯があって墓碣銘は完成した。

道純諱は全善、號抽齋。道純は字。始め學を市野迷庵にうけ長じて狩谷掖齋に學ぶ。當時古學を論ずる者は必ずこの二者を擧げたもので、道純はこの兩先生からしっかりと學びとった。學の根底が世醫と異なること宜なるかなである。道純はいう「醫の妙處は必ず讀書中より得來り、亦た必ず古書中より得來る」、またいう「古書善本を徵し、古醫經を校し、以て古醫道を味わう。吾が事畢れり、何ぞ必しも屑々焉として世醫と長を爭わんや」。かつて芑庭は迷庵・掖齋が沒し、世間に古書を鑒別しうる者がいず、今では道純と森立之だけがその傳統をひきついでいる。そこで相い謀って「經籍訪古志」を撰述した。漁村またこれに關與し序を草した。なかでも道純の力がとりわけ大きかった。道純は精善な古書を多く藏していた。古學を志す者はみな借覽して學んだ。著書に「素問識小」「露樞講義」等々。年五十四。三子あり、みな漁村に學ぶ。

墓碣銘の末にいう、「嗚呼、吾所親交、如小島寶素、丹波芑庭曉湖二君及堀川舟庵、數年之間、皆相繼歸道山、今復遇道純之奄沒、執筆以志墓石、能無慨焉三歎矣乎」

道純の墓碣銘はおおよそ右の如き內容であるが、碑石を建てる段になって一悶着が起った。森鷗外はいう、「海保漁村の墓誌は其文が頗る長かったのを、豊碑を築き起して世に傲るが如き狀をなすは主家に對して憚があるといって、文學を識る四五人の故舊が來て、胥議して斧鉞を加えた。其文の事を傳えて完からず、又間實に悖ることさえあるは、此筆削のためである。[13]」

ここで「經籍訪古志」について附言しておきたい。元來「經籍訪古志」は狩谷掖齋に指敎をうけ、芑庭の別業における綠汀會の議論の中から生まれ、世に森立之、澁江道純の共編と傳えられている。ところが昭和十年長澤規矩也は「初稿本經籍訪古志」解說において、初稿本をみる限りに於ては、漁村の功に歸すべきものが多く、從って漁村は森立之と並んで編者としてここに名を擧ぐべきだと主張する。[14] 事實この書の最終的なチェックは漁村が行っていた。

安政六年五月、元起と本所に芍藥をみ、歸路吾妻橋西に食す。九月、元起と向島に至り、鰻鯉を鮒政に食す。

越えて万延元年、「三月三日雨雪。大老伊井侯將趨朝、有浪士數人、要之於櫻田郭門外、斬其首級而去。」この未曾有の事件について漁村は如何なる感懷を有したであろうか。水戸の浪士とはすぐ知れたであろう。漁村は水藩と關わりがないわけではない。その三日後、「孟子補證」を訂正し、その後に「按孟子爲人君說王道、梁惠王上下篇、其盡之矣、故以首篇云云」と書く。王道こそが漁村の共鳴し目指すところであった。浪士の力づくの行爲をよしとするものではない。この夏ころから身體の不調がつづく。

文久元年、六十四歳。江戸では疱瘡が流行する。この年澁澤榮一が入塾する。往時を回顧して澁澤はいう。その時春先の農閑期の間だけでも江戸へ出て勉强したいと父に懇願した。「無理に止めると出奔もしかねまじき風に見えたらしく、父は已むを得ず私の江戸出遊を許されたのであった。私は飛び立つほどの嬉しさを感じながら、匆々に旅裝を整えて江戸に出て、下谷練塀小路の海保漁村の塾生となって漢籍を學んだが、私の本來の目的は偉小學者になろうというのでもなければ劍術家になって身を立てようというのでもない。天下の志士に交りを求めて、弘く天下の事情を察し、機會を見て討幕の實行を期しよう

という腹があったから、塾に在つても讀書するよりは寧ろ有志との交際に力を用い、又神田お玉ヶ池の千葉の道場に出入りして劍客と懇意を結び、盛んに国事を論じたものである……。江戸には二ヶ月餘り滯在し、其年の五月頃一旦郷里に歸った」[15]翌年再び傳經廬に籍を置くが國事への關心が主で、この時も四ヶ月ほどで歸郷する。澁澤榮一と漁村との關係は、要するに青春の一時期をここに過したといった程度の輕いものであった。

文久二年、濕瘡を患い床につくこと百餘日。十月、福山の小島成齋歿。「成齋小島先生墓表」を書く。墓表にこうある。

許氏說文の學は、狩谷棭齋によって復活し、その一門によって進展した。しかしこと十餘年、耆宿は凋謝し、今日では福山の小島成齋ただ一人になった。かれは少壯にして市河寛齋について近體詩を學び、その子米庵からは書法を學んだ。のちこれらを棄去しひたすら棭齋の學問に集中した。かれはいう、讀書は治經こそ第一。治經はまず說文に求め、說文で不明な點は博く諸書を參考する。これが爲學の法である、と。書家として立つ志はなかったが名筆の聞えは世に高かった。また段玉裁の說文注の不備を補って「說文段注補正」を著わし發明するところ頗る多かった。棭齋の影響をうけた松崎慊堂に深く信頼され、慊堂の石經校勘の際には文字學の分野で助言するところ大であった。晩年には篆隸にも通じていたが、書は吾が餘事と語り、かれ獨自の律令研究に傾注し「讀禮札記」「讀律私記」等を著す。

成齋、諱は知足。字は子節、姓小島氏。世々福山藩士。性豪放、自ら風翁と號す。文久二年十月十八日歿。時に年六十有七。

思えば安政四年に丹波苣庭が死に、その十月には親しかった八歳年下の丹波曉湖が急逝し、翌五年には六歳年下の澁江道純が不歸の客となり、さらに二年後には二歳年長の小島成齋の死を送り、しかも文久三年には十四歳年長の故反荒井堯民と死別する。「此の時に當りて錦門の諸友凋謝し略ぼ盡く」。生きてある者は野州今市に住む大槁省庵のようにすべて他郷にい、晩年ともに語るべき友はただ曉民のみであった（文久三年の條）。

錦門の學風をよく傳えたといわれるものに澁江道純の「德語」の一節がある。これを森鷗外が引いている。次の如くである。

凡そ學問の道は、六經を治め聖人の道を身に行うを主とする事は勿論なり。扨其六經を讀み明めんとするには必ず其一言一句をも審に研究せざるべからず。一言一句を研究するには、文字の音義を詳にすること肝要なり。文字の音義を詳にするには、先ず善本を多く求めて、異同を比讐し、謬語を校正し、その字句を定めて後に、小學に熟練して、義理始て明了なることを得。譬えば高きに登るに、卑きよりし、遠きに至るに近きよりするが如く、小學を治め字句を校讐するは、細碎の末業に似たれども、必ずこれをなさざれば、聖人の大道微意を明めること能わず（中略）故に百家の書讀まざるべきものなく、さすれば人間一生の内になし得がたき大業に似たれども、其内主とする所の書を專ら讀むを緊務とす。それはいずれにも師とする所の人に隨いて教を受くべき所なり。さて斯の如く小學に熟練して後に、六經を窮めたらんには、聖人の大道微意に通達すること必ず成就すべし……。[16]

要するに六經に通じ聖人の道を了得するためには一字一句の嚴密な考證、理解を通ぜねばならぬとするもので、錦城以來の爲學の法がこれであった。

文久二年という年、幕府は異例の人事を發動する。昌平黌教授に藩國から三名の學者を拔擢する。いずれも朱子學を專攻せず、古學の系

列にある者たちである。曰く山形の鹽谷毅侯、田中の芳野叔果、飫肥の安井息軒である。天保から安政にかけて、昌平黌も多難であった。林家中興の祖といわれた第八代林述齋が沒し、續いて林檉宇、古賀侗庵、河田迪齋、林復齋、佐藤一齋らの大物も相い繼いで沒し、林家の學風は衰滅の兆し著しいものがあった。こうした狀況の中で、幕府自體も學問振興のため思いきった學制改革をすすめざるを得なかった。學派學閥にとらわれている狀況ではない。優秀な人材こそ待望された。文久三博士はかくして登場した。

元治元年、六十七歳。「張仲景攷」を書く。

慶應元年、六十八歳。死の前年である。八月、家藏本の東涯「盍簪錄」を校正する。東涯の「漫筆」を三十年の昔、天保三年に讀んで敬服して以來一貫してその博學洽聞、確當さへの傾倒は變らない。

慶應二年、七月二十日、將軍家茂沒。この時漁村は病んでいたが八月朔に至って激痛が起こった。數日にして一旦はおさまったが、八日には痛みが再發。しばらくしておさまるが氣力は衰える。九月十二日、七月に京都に旅立った劉雲從が江戸にもどり早速に漁村の病床に驅けつけるが、この時には漁村はただ涙を流すだけで一語も發することができない。十五日から危篤狀態におちいり、十八日歿。享年六十九歳。本所普賢寺に葬る。

漁村の死の前後を「澁江抽齋」では次のように記している。

海保漁村が九年前に病に罹り、此年八月其再發に逢い、九月十八日に六十九歳で歿したので、十歳の（澁江）成善は改めて其子竹逕（元起）の門人になった。しかしこれは殆んど名義のみの變更に過ぎなかった。何故というに、晩年の漁村が弟子のために書を講じたのは、四九の日の午後のみで、其他授業は竹逕が悉くこれに當っていたからである。漁村の書を講ずる聲は呟嗄れていたのに、竹逕は音吐清朗で、しかも能辯であった。後年に至って島田篁村の如きも、講壇に立つときは、人をして竹逕の口吻態度を學んでいはせぬかと疑わしめた。竹逕の養父に代って講說することは、啻に傳經廬に於けるのみではなかった。竹逕は弊衣を着て塾を出で、漁村に代って躋壽館に往き、間部家に往き、南部家に往いた。勢此の如くであったので、漁村沒後に至っても、練塀小路の傳經廬は舊に依って繁榮した。[17]

漁村の墓表は養嗣子竹逕名は元起が書いた。漁村の友人たちはかれに先立って歿していい、結局その生平をよく知る元起が漁村の日記や文章を參考にして書きあげた。文は漁村の過ぎ越し方をていねいに敍述し、結びにこう述べる。

幼にして其の先考恭齋府君に從いて句讀を受く。みな古注疏に依る。その晩年專ら力を此に用うるも亦た偶然に非ず。性孤僻、其の書を讀み己を行うのみ。時趣に合わず。是を以て終身轗軻以て歿す。此れ憫れむべしと爲すに似たるも、而も處士にして終に此れを以て彼に易えず。

（五）

漁村の著述はいたって多い。「年譜」所載の著述目錄によると、「周易漢注考」から「漁村文話」に至るまで三十點に及ぶが、その多くは寫本で傳來している。

「漁村年譜」正續四卷「經學字義古訓」一卷「抱腹談ノ捧腹」一卷「論語駁異」一卷「周易校勘記事」一卷が「儒林叢書」に、「讀朱筆記」三卷「傳經廬文鈔」一卷が「崇文叢書」にそれぞれ收藏され、「漢文大系」に「文章軌範補注」七卷が收められている。他に刊本として

「周易古占法」四卷、「漁村文話」四卷等がある。

中にあって「論語駁異」は、昭和十三年漁村記念會によって「年譜」に付載されて刊行されている。その序によると、近ごろ書賈が近人の經解數部をもって訪れその中に「論語欄外書」があり、一齋居士稿と題してあった。この書は專ら余姚によって朱子を難じた師心臆決の說で滿ち、世の學者を害すること甚しい。そこで學者が邪說に陷いらないよう謬論の甚しいものを採り上げて反論することとした、というものである。

一齋が王學の立場から注釋した例としては、爲政篇の「視其所以」章の「視其所由」に注して「視觀察、並是良知作用」といい、また同篇「由、誨女知之乎」に注して「行而眞知之是知、不行而徒知之仍是不知」とある。前條について漁村は「按視觀察、是聖人精之又精之、觀人之際、不可苟已、所謂一齊照破、唯致良知者、或可能爲之、然恐非聖人之意也」と批判し、後の條については「按禪宗之敎、存養在先、頓悟在後、故曰、行至水窮山盡處、那時方見本來眞、此陽明知行合一、行而後知之說、所從出也、以此附會聖經、非妄則愚也」ときびしく反論する。

他の場合をみてみよう。學而篇の「君子不重則不威」章について一齋は「學則不固、疑學字上漏一不字」とする。漁村はいう「按此說極非、晦翁從古注一說、以固爲學之堅固、既是不學、所謂不固者何指也、經本無脫字、而妄補之、大非古人篤實之旨、況其言不成義乎」。たしかに經に一字を增減すること愼重でなければならない。また一齋の論據も不十分である。また續く「主忠信、無友不如己、過則勿憚改」において一齋は、「既忠信則自能擇友改過矣」とする。漁村は「按此語亦有病、忠信固爲諸德之本矣、然擇友自是一道、改過亦是一道、烏可曰既忠信則二者可自能乎」と批判する。しかしこの條一齋の云い分にも一理あってことさらに難ずるほどのものではない。

「論語駁異」の一書は、朱子の說を中心に一齋說を難じたもので、漁村の朱子重視の立場のよく知られるものである。ただこの書は「學而」から「鄕黨」までで終ってい、いわば未完の書に屬す。なお「論語駁異」及び「論語漢注考」については高田眞治「論語の文獻注釋書」に所說がある。

漁村の文集は二種存在する。一は明治三十八年川口嘉の跋をもつ「漁村先生遺稿」一冊が寫本で川口嘉寄贈で國會圖書館にあり、二は昭和三年館森鴻の跋で崇文院から刊行する。「遺稿」の川口嘉の跋によると「漁村の文章は幾十百篇とあったが沒後今に四十年、今日輯錄しておかなければすべて雲烟に歸すであろう。昨年たまたま石川彬卿とこの件を談じ、彬卿は文鈔が淺沼家に所藏されていい、他にも若干篇があるという。そこで搜集に從事して今春までに數十篇をえ、これを岡崎大輿に編集の業を托し、この書が出來上った」という。そして「遺稿」冒頭の序は依田百川が書く。所收の文章三十二篇。

一方「傳經廬文鈔」の館森鴻の跋にいう。「もともと家に傳經廬文鈔があり、明治時代に漁村の弟子の川口子儀がその遺文の散佚を憂え島田子和を介して訪ね來り、三十八篇を抄寫した。近ごろ子和がその書を出し示すのを見、自分で讀んでみると遺漏があった。そこで往日抄錄したものを取り出して補いすべてで四十九篇（實は五十二篇）、これを一冊として崇文院から刊行した」

たしかに後に刊行された「文鈔」の方が篇數も多く補充されていることは知られるのであるが、「遺稿」にあって「文鈔」にないもの、たとえば「丹波苣庭先生墓誌銘」をはじめとして十二篇に及んでい

る。大きな相違である。從って漁村の文章を考える場合には、刊本の「文鈔」が入手し易く便利ではあるが、「文鈔」に缺けている文章が「遺稿」に存するわけで、どうしてもこの二書を參看する必要がある。

水戸藩の森蔚は「漁村文話」の序で文章は「意達而言文、文章之能事畢矣」であるが漢以降これを實際に行ったものは唐宋八大家のみである。まことに適切な指導書がなければ文章を十分に練成することはできない。しかも從來この分野で善本がない。そこで漁村は「採摭歷代名人論文之語散見于文集說部中者、參以平生心得之說、綴緝融貫、以成斯書」という。また續篇卷末で梨本宥は、ある人は窮經を本務とする者がなぜこの種の本を書くのかとの問に、先生は平生「經解文章を合して以て一と爲す」の志からであると答える。いずれも嘉永壬子の跋文。

「漁村文話」は文章論を「聲響」から始める。「文ハ古人ノ語氣ヲ學ブナリ。サレバ文ヲ作ラントスルニハ先ヅ古人ノ文集或ハ選本等ニ就キテ數度クリカエシテ熟讀玩味シソノ文勢語路ヲシテ自然我ニ移リテ口ニ騰リ心ニウカミテ吾ガ心ト古人ノ文ト一致ニナラシムベシ」「先儒文章ヲ評シテ言フ所ノ輕重緩急抑揚頓挫ナド云フハ皆コノ聲響ノ細目ナリト知ルベシ」要するに古人の文章のリズム感をわがものとして相卽一體化せよという。これが心がくべき第一のこと。續いて「命意」文の主意を明確にし、その後に「體段」文の仕組み布置を考える。とりわけ「起結」に心を配すること。次に「段落」、「文ニ段落アルハ猶人ニ骨格アルガ如シ」「コノ段落合シテ一篇ノ文章トナルハ人ノ四肢百骸備リテ始メテ完人トナスガ如シ」

以上はいわば形體論で、これに文の生命勢いともいうべき「達意」、一貫する意氣を與えて多くの段落を一脈流通せしめる。「文以意爲車、氣盛文如駕」である。文章は達意が主であるが文中に「詞藻」を適切に點綴裝飾する必要がある。詞藻は「人ノ血肉」の如きものだからである。また文章作成上の工夫で特記すべきものに歐陽修のいう「三多三上」の說がある。三多とは看多と做多と商量多の謂。三上は、文を作るに適した三所の思量の場のことで、一に馬上、二に枕上、三に厠上を指す。

文章は「鍛錬」を貴とぶ。當然のことである。文章を修正する技術的な方法として「改潤法」があり。文章の缺陷とはいかなるものかを說く「病格」がこれにつづき、さらに「十蔽三失」を指摘する。十蔽は袁枚、三失は閻若璩の指摘。たとえば十蔽の一は「心ヲ談ジ性ヲ論ジテ頗ル宋人ノ語錄ニ似タルモノ」。三失は、明以後學問文章が遠く漢唐に及ばない理由の一は、「洪武十七年以後ノ定制ニ八股時文ヲ以テ士ヲ取ルヨリ壞ル、ソノ失陋ナリ」云云。敍事の文は簡を貴ぶが、字數を少くしてしかも的確十分に事を記するのは至難のわざである。省略に過ざれば疏である。「『簡疏』ノ間深ク辯ゼズニハアルベカラズ」。

以下は「左傳紀事」「史傳紀事」「輕重」「正行散行」「錯綜倒裝」「緩急」「抑揚」「頓挫」「警策」「明意敍事」「周漢四家」「唐宋八家」の項を立て具體的にそれぞれの文章を解析する。たとえば「左傳紀事」にいう。「晉楚邲ノ合戰ニ晉ノ軍勢大敗軍ニ及ビタル樣ヲ記シテ、中軍下軍爭舟、舟中之指可掬ト書ケリ（宣十二年）。コレハ敗軍ノ士卒互ニ死ヲ免レントイヤガ上ニオリカサナリ我レ先ニ舟ニ取リ乘ラント舷ニスガリ附キタレバ傾キ舟モ沈マントスルホドニ舟中ノ人ハコレヲ拒ミ刀ヲ拔キテ取リスガリタル指ヲナデ切リニ切リハライシ故ニ舟中ニ切リ落サレタル指ハサナガラ兩手ヲ以テ掬イ擧グベキ程ナリトナリ。ソ

レヲ只コノ六字ニテ多クノ人ノ舟ベリニスガリタルサマメツタ切リニ指ヲ切リハライタルサマ言ワズシテ觀ルガ如シ。」名文の名解説である。

「漁村文話」續篇は「漢以後文體源流」「唐古文源流」「韓柳文區別」「唐宋古文區別」「韓文來歷」等々十五の表題からなっている。「韓文來歷」にいう。「韓文ノ尤モ及ブベカラズトスル處ハ字々根底スル所アリテ苟モセザルニ在リ」としてこれを證するに黄山谷、晁公武の所説を引き、しかも「ソノ字句ノ經傳子史ニ根據シ來ルモノ一一精錬シ出シ字字融化シテ渾然天成一モ斧鑿ノ痕ナシ、コレソノ及ブベカラズトスル所ナリ」。これは次の「古文有本」に「古人ノ文多クハ本ク所アリ。唯ソノ步驟馳騁ノ妙卓然トシテ別ニ一家ヲ爲スヲ以テ名手トスルナリ」と同旨である。要するに正編に述べてきた文章論の具體的な結晶ともいうべき作品がここにあり、その構造はかくの如くであると説くのが續篇である。煩を厭わず指摘すれば、韓愈の文章の良さは字々本づく所あり乍らしかも渾然熟成すべて己れのものとした點にあるとして、たとえば爭臣論、范增論の結では、まさに『莊子』天下篇の墨子評に由來すると指摘する。このこと漁村の新發見である。

「漁村文話」正續は、いかにも文章を以て世に知られた實作者漁村の經驗を通じた文章論であるとともに、考證を學の根本に据えた漁村ならではの博搜博識があってはじめて生み出された文章論の秀作である。[18]

慶應二年九月十八日、漁村歿。六十九歳。錦城の高足として學識も深く文章も秀拔、しかも生涯を一介の處士として終わり、人格も高潔。それにも拘らず世上の漁村評は當代においても後の時代においても必ずしも高いとはいえない。それは何故か。

一つは當時の儒者、學者といわれるものが昌平黌をめぐって（たとえその批判者であろうとも）評價され、漁村はそれとは別系列の醫學館系の儒者で、しかも身體も弱く社交性も乏しく、自ら名を求めることがなかったこと。[19]二にかれが錦城ゆずりの考證の徒で、[20]一部に學力を高く評價する者はあったが、一般的には閑文字を弄するものとうけとめられていた。たとえば同時代の鹽谷宕隱は近ごろの學者は「多クハ一字一文ノ訓詁ヲ研究スルニ專ラニシテ、全體ノ義理ニ疎ク精神ヲ考證ニ費シテ、已ガ博覽ノ名ニ誇ラントス」[21]る考證家はいわば字引學者だと非難する。こうした聲は大きく、まして時世も騷擾の度をいよいよ深めつつあった。

三に漁村の弟子といわれるものに島田篁村、澁澤榮一、鳩山和夫らがいる。しかしかれらは先師の功績についてなぜか多くを語らない。これも漁村評價を小さくし忘れさせていく要因であった。[22]

註

(1) 漁村は「待老筆記」「送老日記」等の自記を殘している。元起はこれらに依據しつつ「年譜」を作成したと思われる。

(2) 文中の書き下し文は、すべて原漢文である。

(3) 「漁村先生遺稿」所收

(4) 「傳經廬文鈔」所收

(5) 石膏は生藥として用いられ炎症性の諸疾患に効能があり、とくに解熱、止渴に効ありとされるが、一方で體力を消耗させるため肉體の衰弱時に用いることは避けるべきだといわれる。漁村が虛弱な體質であったためまず人蔘を與え體力の恢復を圖る方法を柳沿はとったわけである。この項友人木下勤醫師の指教による。

(6) 「漁村先生遺稿」所收

(7) 國會圖書館に「漁村筆記」として「七經小傳」「西溪叢語」「雲麓漫抄」外六篇の手鈔本一冊が所藏されている。
(8) 安井小太郎「日本儒學史」二四八頁
(9) 森鷗外「澁江抽齋」その六十八
(10) 漁村は生來虛弱であったが、この時の病氣が全快せず九年後の死因となる。
(11) 「年譜」では「多岐」とあるが、「大日本人名辭典」により「多紀」で統一した。
(12) 森鷗外「伊澤蘭軒」その三百三十三
(13) 注(9)に同じ。
(14) 書目叢編「經籍訪古志」の卷末附載による。
(15) 澁澤榮一「青淵回顧錄」三七頁
(16) 森鷗外「澁江抽齋」その五十六。「癒語」は未見。
(17) 森鷗外前揭書その七十七
(18) 一九九四年、王水照・吳鴻春編選で「日本學者中國文章學論著選」が上海古籍出版社より刊行され、その中に「漁村文話」正續も漢譯されている。
(19) 「傳經廬文鈔」所收の「送穀道先生還肥前序」に「吾平生交友不多、身復善病……」とある。
(20) 廣瀨淡窓「儒林評」に大田錦城について「其行狀ニ至リテハ毀リヲ得ルコト北山ヨリモ甚ダシ。兒謙、樺島石梁ニ遇イシ時、樺梁ノ話ニ、某ハ數十年東都ニ居タレドモ、天幸アリテ北山・錦城ナドニハ、途中ニテモ行逢ワザリシト語リシトゾ」という。錦城の惡評が高弟漁村にも影響するところがあったかとも思われる。
(21) 鹽谷宕隱「視志緒言」中の「讀書ノ法ヲ論ズ」
(22) 海保漁村について書かれたものに次の二論文がある。
金杉英五郎「海保漁村先生に就て」斯文第十九編第八號
濱野知三郎「海保漁村先生の業績」斯文第二十一編第十號
なお島田篁村に「祭海保漁村先生文」がある。また「文章軌範補註校本序」でも漁村について少しく言及する。いずれも「篁村遺稿」上所收。